

イスパニア音楽の特徴 XIV

インターミッション

— 地域差と多様性 パイス・バスコ その一 —

José Santiago ÁLVAREZ – TALADRIZ

はじめに

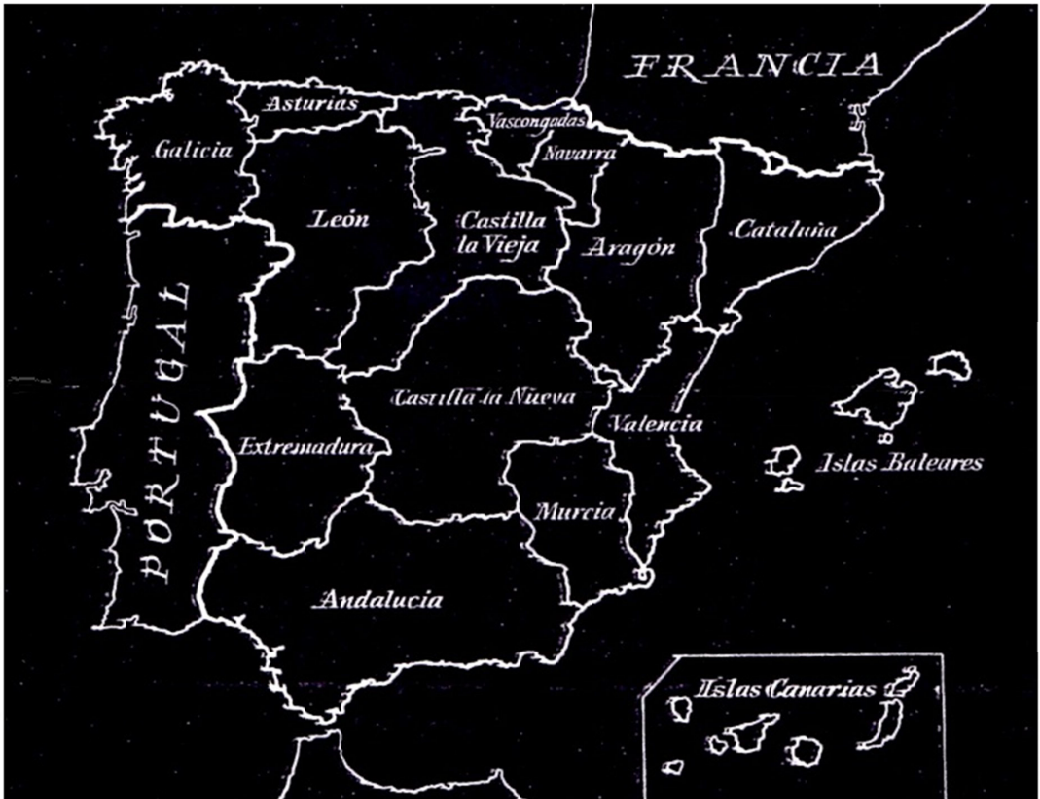
本シリーズでは、イスパニア音楽のリズム的特質について論述してきた。本稿からしばらくの間は、新たな視座を求めて、共通性としてのそれではなく、地域差に目を向けて、イスパニア音楽を概観してみたい。

イスパニア音楽と地域

イスパニア文化の地域差に言及するとき、その地方区分を如何なるものにするのかについては、議論が必要となろう。例えば、行政主動の公文書などで取り上げられる場合においては、今日の大きい行政区画である「州(各々州によりその呼称が異なる)」ごとに行なわれることが多い。この州の区割りとは、所謂1978年憲法で導入された自治州制度に基づき、1979年から1983年までに制定されたもので、実際上の文化的まとまりとは一致しないことも多い。そこで、本稿では、19世紀半ばに定着したとされる、旧来の文化圏による区分を、用いることとする。その区分に従い、音楽的差異にうまく妥当する基準としては、イスパニアの著明な音楽学者のマヌエル・ガルシア・マトス(Manuel García Matos)が、『マグナ・アントロヒア(Magna Antología del Folklore Musical de España)』< UNESCO / HISPAVOX >に用いた地域区分が存在するので、本講では、引き続き、基本的に、これを用いることとする。

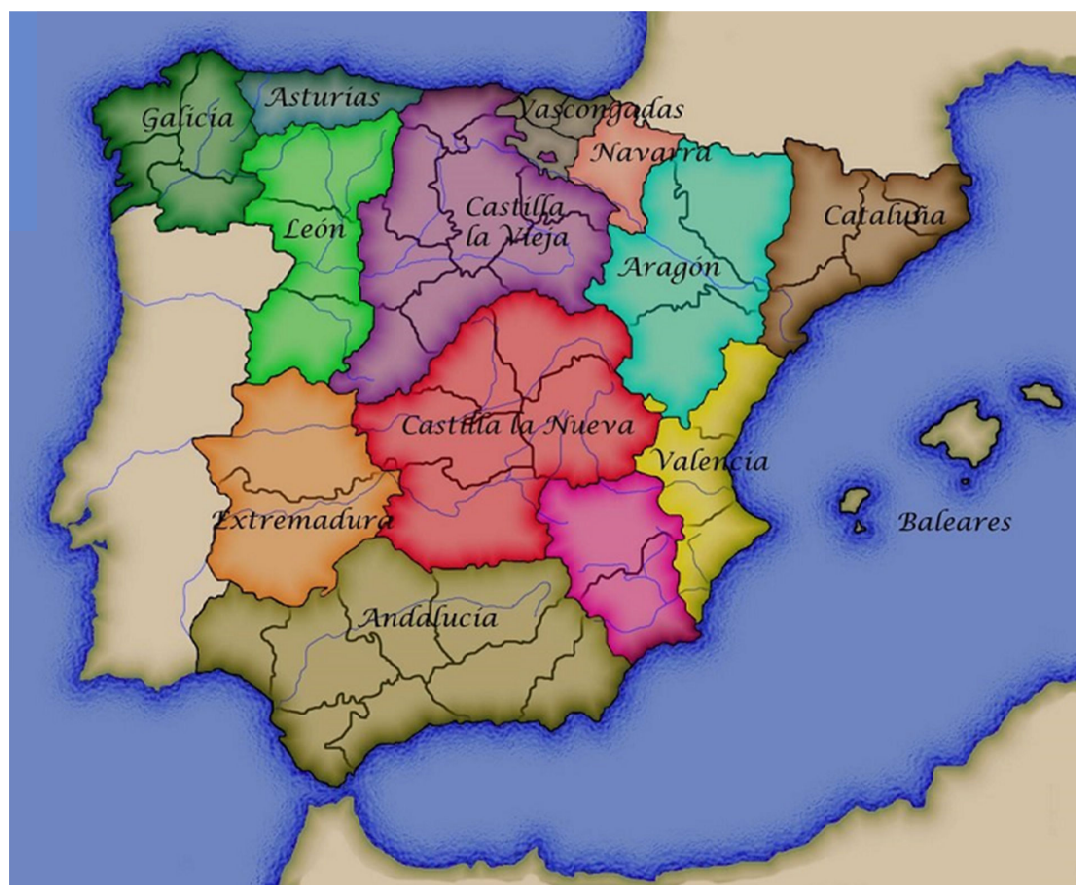
ガルシア・マトス著の同書の中に Mapa Regional de España という図版で示されている。

次にその Mapa Regional de España を示す。



また、この地方区分に近い形で、地域別の楽譜集成が、フアン・イダルゴ・モントヤ（Juan Hidalgo Montoya）氏らによって、『イスパニアのフォルクローレ（Folklore musical español）』として、編まれており、今日でも、入手可能である。

本稿では、これらの地域区分を念頭に記述を進めたい。ただし、旧カスティージャと、レオンとの区分に、特にバジャドリール県等の扱いについて、考えを異にする点があるので、小論では概ね、次に挙げた地図の区分で論述することとする。



イスパニアの言語と エウスケラ?

さて、イスパニアに於いて、文化的差異が最も顕著に見て取れるのは、言語についてであろう。イスパニアには、4種の言語と、その方言とが存在するといわれる。このような考え方は、イスパニアの言語を、文法体系が大きく異なるものを、その方言と捉えることとしたときに生じる。地域の言語を、カステジャノ(Castellano)、カタラン(Catalán)、ガジェゴ(Gallego)、エウスケラ(Euskera)の4言語とその方言としてとらえようというものである。この4言語以外に、バレンシアノ(Valenciano)と、アラネス(Aranés)とが、自治州の公用語となっているが、学問上の細かい分類に目をつぶれば、多くのイスパニア人が、この二つの言語を、カタランの方言と考えている。

先に挙げた4言語を見ると、エウスケラ以外は、所謂インドヨーロッパ語族に属する。エウスケラ(日本では「バスク語」といわれている)は、旧西ヨーロッパに、ぽつんと現存する、例外的な言語ということになる。『膠着語』的な特徴を持つとも言われる。正確には、膠着語そのものではないようだ。しかし、外見上は、日本語の助詞に当たる様な部分

を持つかにみえる。

文法的視点で見れば、カステジャノ (Castellano)、カタラン (Catalán)、ガジェゴ (Gallego)、の3言語とは、大きく異なるが、使用される字母には、共通点が多い。アカデミア・エスパニョラの定めた現行のカステジャノの字母とほぼ同じ27文字、つまり、A, B, C, D, E, F, G, H, I, J, K, L, M, N, Ñ, O, P, Q, R, S, T, U, V, W, X, Y, Z に、Ç と Ü とを加えた29文字であると言われる。La Real Academia de la Lengua Vasca – Euskaltzaindia (王立バスク語アカデミー) によると、C, Q, V, W, Y, Ç は外来語にのみ用いられ、Ü は主に、スベロア方言の表記に用いられるとのことである。

語彙の面では、独自性が高く、エウスケラの話者以外には、カステジャノ等のインドヨーロッパ語族からもたらされた語彙以外は、その意味を想像することすら難しい。このような特性から、「古代言語の生き残り」などと言われることもある。先に、『膠着語』と記したが、純然たる膠着語では無く、あたかもその様な特徴を示す言語ということである。

膠着語である日本語との類似性を示すために、例を示そう。日本語の「ゲルニカの木」を、カステジャノとエウスケラとに訳すと、次の様になる。

“Árbol de Guernica” (カステジャノ)、“Gernikako Arbola” (エウスケラ)、カステジャノでは、ゲルニカの地名の前に、前置詞の“de”が付き、最初に、「木」を示す“Árbol”が来る。語順としては、英語と同じである。

ところが、エウスケラでは、ゲルニカの地名の末尾に、日本語の助詞の「を」にあたる接尾詞の“ko”が付き、その後、「木」を示す“Arbola”が来る。語順としては、日本語と同じである。このように語順から見る限り、他の三言語とは、明らかに異なっている。エウスケラつまり、バスク語が、イスパニアの他の地域の言語と全く違った様相を呈するものであることが分かる。

更に、カステジャノ (Castellano)、カタラン (Catalán)、ガジェゴ (Gallego) が、ストレス・アクセントであるのに対して、エウスケラ (Euskera) は、日本語と同じ高低アクセントである。

エウスケラ バスク語と音楽的要素

エウスケラ、日本で言うところのバスク語の、音楽に関わりそうな要素を見ていくと、そのフレーズのまとめ方が、日本的なフレーズのまとめ方に類似しているのではないかということに気づく。

筆者は、言語学者ではないので、深く触れることをしないが、20年近く外国語教育にも携わった経験から見て、その音楽的語り口とでも言えるものに、類似点を見出すのである。

話者の、フレーズの終わりに関わる意識が、バスク語と日本語とは、似ているのではな

いかと考えるのである。「纏まりのつけ方の差異」とでも呼べばよいのであろうか。

- 始めと終わりにしっかりと区切りをつける一般的西欧言語
- 全体像は大掴みにして、細部を個々に示す日本語やバスク語

といった、差異があるように感じられる。

この相違が、言語の音響的なフレーズ感の特性にもつながるものではないかと考える。そして、更に、音響的・音楽的特性のうちの「音価」の捉え方につながるものであろう。

この感覚が、「音」つまり、言語の音響的特徴につながった時に、フレーズの終わりの感覚の差異となって現れるように考えられる。

つまり、導き出された考えは、日本語やバスク語は、文の個々の要素には気を使うものの、ここまでが区切りという感覚は、音響的・音楽的には、稀薄であるということである。

ものごとの始めと終わりがしっかりしているカスティジャに代表されるイスパニアや、ヨーロッパの多くの地域での捉え方とは違い、バスクや日本では、「ここで終わり」といった感覚が、音響的・音楽的には、それほど明確ではないという特性が示される。

では、この特性が、音楽的要素に於いてはどのように表れてくるのであろうか。ここに、その例を挙げてみることにする。しかし、エウスケラ バスク音楽の例は、後述するので、ここではまず、イスパニアと日本との比較の例から示すことにする。

イスパニアの音楽や舞踊の教師は、「1と2と3と4と1」という様にその拍節感の最初と最後が明確になるように示そうとするが、日本では、「1と2と3と4と」と、次の第一拍が始まるタイミング、すなわち、前の最後の拍の終わりを明確に示そうとは、ことさら努力しないのである。そのことが、拍の終わりが間延びしたり、何故か、休符があるようになっていても、気にしない状況を生み出している気がするのである。

その例として、今日でも良く、応援団などが使う、『三・三・七拍子』という呼称が挙げられよう。この拍子は、どう考えても、4拍子である。つまり、以下の様なものである。

「一 二 三 休 | 一 二 三 休 | 一 二 三 四 | 五 六 七 休」

ここに、示したように、3拍子と言いながら、3拍目の終わりの音価の意識が希薄なために、実は、4拍子になってしまっている。これは、多くの人が抵抗なく受け入れることのできる例であろう。

3拍子と4拍子との混同には、逆の例も見られる。この例は、調査研究に基づくものではないが、顕著に筆者の記憶に残っているので、また、同じ体験を、他者からも聞いたことがあるので、あながち特異な例と言ったかたづけすることもできないであろう。

その例とは、所謂『バイエル』の初学者の演奏例である。小学校教員採用試験を目指している大学生の受験準備の手伝いをしていた時に、F.Beyer の作品 101 の No. 48 を練習していた学生の何人かが、各小節の末尾に4分休符を無意識に挟んでしまっていた事である。筆者の体験の中での極めつけは、大学生ではなく、友人の代役で教えた小学校低学年

の男児であった。「要らないところに4分休符が入っているよ」と、指摘すると、弾きながら、「ミーレド ね、 ミーレドでしょ。」という風に、自分が休符を挟んでしまっている箇所「ね」や「でしょ」を入れて、自分が正しいことを示そうとしたのである。そこで、こちらが弾くので、さっきみたいに、「ミーレドね、ミーレドでしょ。」と、それに合わせて歌ってみてほしいと頼みやってもらうと、やっと自分が休符を挟んでしまっていることに気付いたのである。

これらに似た現象が、エウスケラ バスク語話者に於いても生じてしまうのではなかろうか。

エウスケラ地域での音楽

まず、エウスケラ地域、つまり、所謂「バスク語」を話す地域を限定する必要がある。この地域のナショナリズムを示す語としては、「七つは一つ(Zazpiak Bat)」が、有名である。この七つとは、Vizcaya (Bizkaia)、Guipúzcoa (Gipuzkoa)、Álava (Araba) の三県からなる País Vasco 州と、一県一州の Navarra (Nafarroa <Garaia>) のイスパニア地域、Baja Navarra (Nafarroa Beherea)、Labort (Lapurdi)、Sola (Zuberoa) のフランス地域を示している。

この七つの地域が、エウスケラ地域ということになるが、『イスパニア音楽の特徴』と題するシリーズであるので、イスパニア域内の四地域に限定して扱うこととする。

更に本稿では、エウスケラ (バスク語) 話者の多い、País Vasco の地域の音楽を扱うこととする。

この地域、Vizcaya (Bizkaia)、Guipúzcoa (Gipuzkoa)、Álava (Araba) の三県の音楽については、フアン・イダルゴ・モントヤ氏らによる『イスパニアのフォルクローレ』シリーズのなかに、フアン・デ・オルエ・マティア(Juan de Orue Matia) 氏による楽譜集成があり、参考楽譜として用いることができる。また、Euskomedia のホームページ等でも、楽譜や、音楽に関する資料を得ることができる。

それでは、先に挙げた4つの言語地域のうちで、エウスケラ地域の音楽に、何か特徴的な要素が見受けられるであろうか。

筆者の知る限りでは、2つの特徴がこの地域の音楽に認められる。

1つは、「歌垣」とも言える習慣があることである。

もう1つは、フレーズの重なりによる拍節感の揺らぎである。この拍節感の揺らぎは、イスパニア音楽全般のリズム的特質でもあるヘミオラとは趣を異にするかたちで、拍の扱いが揺れる状況が見られる。それは、同一詩形を持つ楽曲であるのに、ある時は5拍子で記譜され、あるときは6拍子で記譜されたりするのである。また、別の楽曲の場合では、8分の7拍子が、4分の4拍子で記譜されたりするのである。

このような拍の数のずれの許容は、ほかの地域では、めったにみられるものではない。勿論、はじめから5拍子や7拍子で、記譜されたり、作曲されたりする楽曲は存在する。しかしながら、同種の楽曲が、8分の6拍子記譜と8分の5拍子記譜とで存在することも見受けられるので、興味深い。

本稿では、この2つの特徴のうち、純粹に音楽的特徴である、後者の拍子の問題に言及する。

特徴的な拍子感

この地域の特徴は、5拍子や7拍子といった複合拍子が、頻繁にみられることである。筆者がこの点に興味を持ったのは、30年程前に、“Cien piezas vascas para flauta dulce”という、エウスケラ（バスク地方）のリコーダー（flauta dulce）の教材を目にした時であった。そこには、楽曲の難易度から見て、日本でいえば、小学校の高学年から中学生向けの教材であろうと考えられる楽譜が、集められていた。その中に、当然のごとくに、5拍子や7拍子の楽曲が収められていたのである。その後、J. Guridi（グリディ）や、J. M. Iparraguirre / Iparragirre（イパラギレ）や、P. Sorozábal（ソロサバル）らの楽曲等により、再び5拍子や7拍子といった複合拍子を目にすることとなった。その結果、エウスケラ地域に、これらの拍子の楽曲が、多く見られることを再確認した。しかしながら、その記譜が、必ずしも安定して5拍子や7拍子ではないことにも気が付き始めた。

ガリシア出身の音楽学者の José Antonio Arana Martija が、1981年の5月19日に、サン・セバスティアンで行なった“IPARRAGUIRRE Y EL FOLKLORE VASCO”という講演の記録の中に、興味深い比較譜を見出したのが、一つのきっかけであった。

更に、Karlos Sánchez Ekiza 著 “En torno al Zortziko” に、同じ詩形の歌詞を持つソルチコに、異なる拍子を持つ楽曲があるという表を見出したことにより、興味が深まった。そこには、同種に属する楽曲が、8分の6拍子、4分の2拍子、8分の5拍子で、記譜されているとの記述があったのである。

次にその表を示す。

CANCIÓN	COMPÁS	ESTROFA
Kantari Euskalduna (Gitarra zartzo bat)	5/8	Zortziko txikia
Gernikako Arbola	5/8	Zortziko txikia
Zugana Manuela	2/4	Zortziko txikia
Nere Maitiarentzat (Ume eder bat)	6/8	Zortziko nagusia
Nere amak baleki	5/8	Zortziko txikia
Adio euskal-erriari	5/8	Zortziko txikia
Nere izarra	5/8	
Ezkongaietan	5/8	Zortziko nagusia
Amerikatik Urretxuko semiei	5/8	Zortziko txikia
Gora Euskera!!	5/8	Zortziko txikia
Errukaria	5/8 - 2/4	
Nere ongile maiteari	6/8	Zortziko nagusia
Nere etorrera (Ara nun diran)	6/8	Zortziko nagusia
Glu, glu, glu	3/4	

更に、文献や、楽譜から、この拍子感の揺蕩いは、歌詞と関係がありそうだと考えるようになった。しかし、このような記譜のずれは、声楽を伴う楽曲に留まらず、器楽曲や舞曲にも見出されることがわかってきた。

その後、日本のわらべ歌を採譜していた折に、同じ音価に当てはまる歌詞の音節が多い部分や、息継ぎが充分にほしい部分で、あたかも、そこに休符があるかのように「間」が空いてしまう演唱者があり、このような観点も、エウスケラの音楽の拍子の揺蕩いを考えるのに、必要なのではないかと思うに至った。

これらの点を踏まえて、エウスケラの音楽を、拍子に着目して見て行くこととする。そこで、エウスケラ バスク地方の音楽で、日本でも知名度のある曲種として、本稿ではソルチコ (Zorcico / Zortziko / Zortzico) を取り上げる。

ソルチコという形式

ソルチコという形式には、舞曲も、声楽曲も、歌唱を伴う舞曲も存在することが知られている。その詩形により分類を行なうと、Zortziko nagusia, Zortziko txikia, Zortziko Handia, Zortziko ertaina 等に、大別できる。

これらは、詩行の数と押韻のパターンに特徴があり、韻律を示すと下記のようなになる。

Zortziko nagusia : 10 / 8A / 10 / 8A / 10B / 10B / 8C / 10D / 10D / 8C

Zortziko txikia : 7 / 6A / 7 / 6A / 7 / 6A / 7 / 6A

Zortziko Handia : 10 / 8A / 10 / 8A / 10 / 8A / 10 / 8A

Zortziko ertaina : 8 / 7A / 8 / 7A / 8 / 7A / 8 / 7A

これらの詩形の後に、別の定型詩句が付加されることもある。また、自由な詩形のソルチコも存在する。ここでは、詩の韻律について論じることとはしないので、話を拍節の多様性に転じることとする。

先にも述べたように、ソルチコという形式には、様々な拍子で記譜されることがある。その例を、順を追ってあたってみたい。

ソルチコは、広く世界に知られているものから、エウスケラまさにその土地の音楽と感じ取れるものまで、幅広く存在する。したがって、芸術音楽の作曲家によるものからはじめ、地方色豊かなものへと目をむけていくこととする。

不思議なことに、芸術音楽の作曲家によるものは、ほぼすべてが、5拍子である。勿論、全ての芸術音楽作品をつまびらかに調べることは、筆者には不可能であるので、遺漏があるであろう。とはいっても、50数年の人生の中で、民謡を編曲した合唱曲以外で、作曲家の署名のある5拍子以外のソルチコにお目にかかったことがない。この事実は、大変興味深いことで、おそらく、音楽理論を十分に学んだ、作曲家にとって、ソルチコは、5拍子で記譜することに必然性があるのではないかと考えられる。

芸術音楽のソルチコ

芸術音楽のソルチコ最初の例として、I・アルベニスの作品をみてみよう。最も有名なものは、España Op.165 No.6 のソルチコであろう。冒頭の部分は、次の様になっている。

ZORTZICO*

6. Allegretto

ben marc. dolce con l'ad.

明らかに、8分の5拍子で、記譜されている。冒頭から奏でられる左手のパートでも、やや遅れて始まる右手のパートでも、所謂、「ソルチコのリズム」が用いられている。

8分の5拍子と特定せず、拍子記号なしで示されている場合があることが興味深い。あたかも、5拍子以外の拍節感の存在を暗示しているかのようである。

さて、このソルチコは、日本でも簡単に聴くことが出来る。A・ラロチャ演奏のCDを入手するのはそう難しいことではなからう。

舞曲としての、あるいは、民俗音楽としてのソルチコ特有のリズム感を活かしながら、見事に綴られていく音楽は、アルバムにある絵画か、写真のようでもある。アルベニスのピアノスティックな中にも、描写的、浪漫的な作品構成の妙が、充分に発揮されている。

ところで、アルベニスには、他にもピアノ曲のソルチコがあることを御存じであろうか。1891年に作曲されたこの作品は、I・スロアガに献呈された作品だと言われている。

Zortzico.

I. Albeniz.

Allegretto non troppo.

PIANO.

実際に、“Edition Mutuelle”の版では Ignacio Zuloaga への献辞が記されている。スロアガは、エウスケラ バスク地方の、ギプスコア県出身の著名な画家である。アルベニスは、スロアガの絵画作品にみられる技法の交錯を、彷彿とさせるソルチコを作曲している。



何と、8分の5拍子と、4分の2拍子とが並奏されるのである。拍の音価に柔軟性を持たせたかのような、この表現方法は、先に述べた、エウスケラ バスク語の持つ、「纏まりのつけ方」の特異性、イスパニアの他の地域の言語との違いから生じるものであろう。ソルチコの拍節的柔軟性・多様性、ここに極まれりというところである。

楽曲全体は、少なくとも記譜の上では、8分の5拍子が支配しているが、そこに、見事に4分の2拍子が、溶け込んでいる。そのために、楽譜上の「拍」の持つ意味が、いや、「拍」の音価の持つ意味が、揺蕩う。ある面で、量的価値が希薄になる。しかし、質的価値は、多様性を持つのである。

これらの点が、ソルチコという楽曲の持つ民俗音楽としての面白味を、充分に表している。

では、その言葉を伴うソルチコを、他の作曲家、イパラギレの作品でみてみよう。

“Guernicaco Arbola (Gernikako Arbola) / ゲルニカコ アルボラ”がそれである。エウスケラ バスク地方の、国としてのバスクの、民衆の心の歌ともいえる存在なのが、この楽曲である。

先に、エウスケラ バスク語の語順の特徴を述べた、「ゲルニカの木」というフレーズをタイトルに持つ、エウスケラ バスク地方の人々にとっては、象徴的な楽曲である。

筆者が幼いころに、イスパニア人の父が、彼は、カスティージャ出身なのだが、何故か、良く口ずさんでいた。父は、小学生の頃、親の仕事の関係で、ゲルニカに住んでいたそうで、その頃覚えたものであるという。それだけ日常的に耳にする楽曲であったのであろう。

筆者は、父が口ずさむたびに、何か違和感を覚えていた。自分の感じる拍節的枠組みに

当てはまらないのである。同じ歌詞を繰り返す部分で、フレーズの締めくくりが、どうも釈然としないのである。勿論それは記譜上に現れる差異ではなく、拍の音価の感覚的な揺れとでも言えるものなのである。

紙面に言葉で、それを明確に示すことは、不可能に近いが、実際の歌唱を、10数種類 You Tube などで聴くことが可能であるので、その5拍子の4拍子や6拍子への揺蕩いを、実体験していただくことが出来よう。歌としての流れは見事に存在するのだが、一たび拍節感を感じようと努力をはじめようものなら、「一体、何拍子なのか？」という疑問が頭を占領してしまうのである。

話を譜面の記譜に戻そう。筆者が閲覧することのできた最も古いエディションの“Guernicaco Arbola”は、1862年刊とされる、Almacen de Música SAN SEBASTIAN のものである。実際に、マドリッドのイスパニア国立図書館にて閲覧することもできるが、インターネット上で、BIBLIOTECA NACIONAL DE ESPAÑA のホームページにアクセスして、BIBLIOTECA DIGITAL HISPÁNICA というところから、日本に居ながらにして閲覧可能である。古いエディションをみたのは、古くから彼の地で歌い継がれていたものに近い可能性が高いからである。

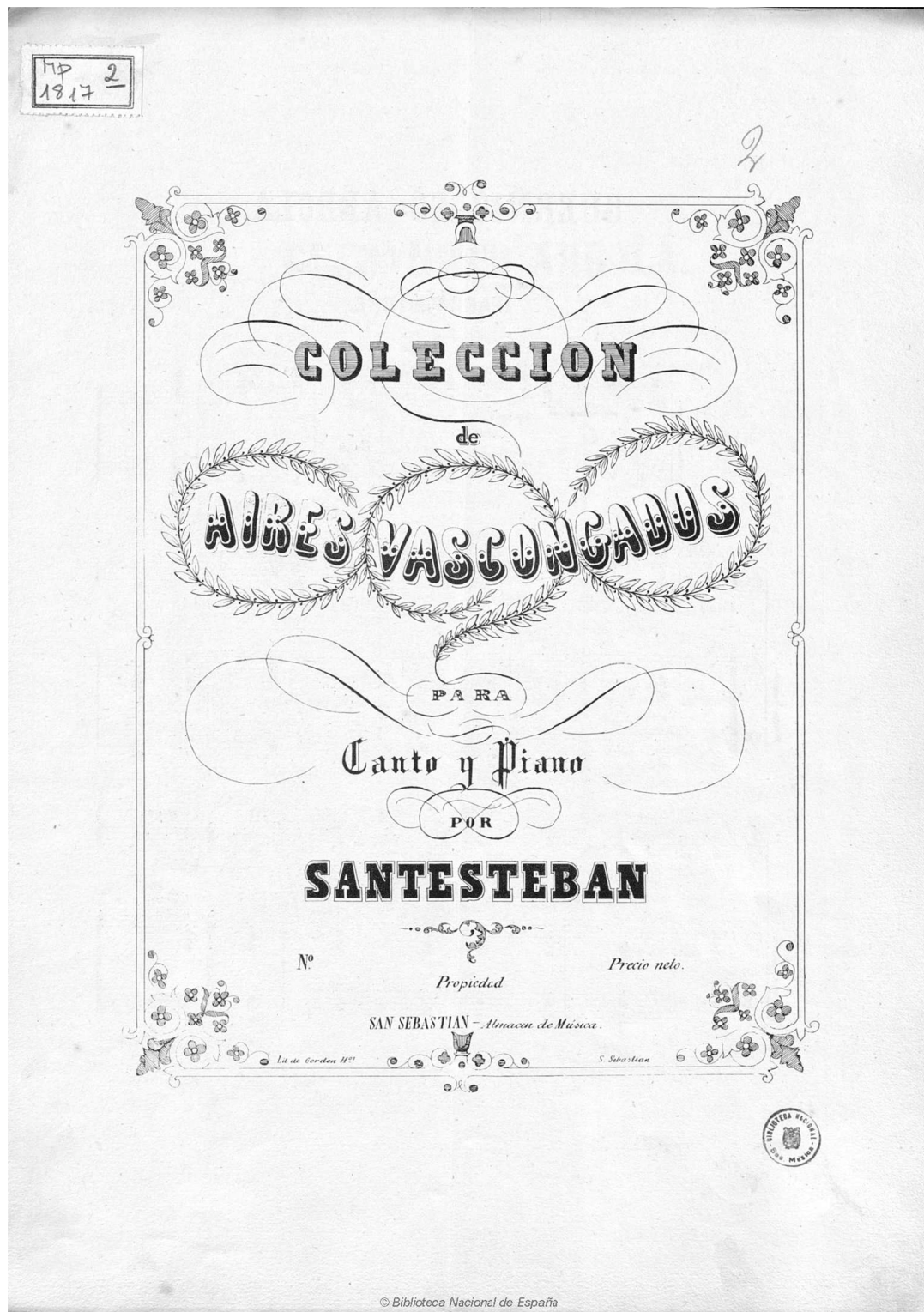
ところが、この楽譜には、大きなミスがあつて、研究者を驚かせる。2003年に、同じエディションの楽譜の複写版をバジャドリ大学図書館で閲覧した時に、そこには朱が施されて、歌いだしの8分音符と8分休符が、それぞれ、4分音符と4分休符とに直されていた。極古い出版例としては値打ちがあるが、分析や学問研究には、いささか問題もある。

ところが、この版は、リプリントされ、20世紀末までは、入手できたというのだから、驚きを、禁じ得ない。

勿論、ソルチコの典型的リズムパターンを理解し、5拍子の拍節感を理解していれば、何の問題も起こらないような間違いであるので、ことさら取り立てて述べるほどではないと考えてしまうかもしれない。しかし、だれでもわかるミスならば、どうしてこれほどまでに長きにわたり、放置されたのであろうか。

もしかすると、エウスケラ バスクの人々は、8分の5拍子の1拍の音価を、厳密に考えていなかったのだろうか。とか、それとも、歌詞のアクセントによるストレスで、音価が左右されることに寛大なのであろうか。とか、考えてしまうのである。

次にその譜面を BIBLIOTECA DIGITAL HISPÁNICA からダウンロードしたPDFで示す。



GUERNICACO ARBOLA,

Zortzico.

Poesia de

IPARRAGUIRRE.

PIANO.



CANTO.



2

3.

p

E - man - da Za - bal - za - zu Mun - du - an fru - tu - ba

E - man - da za - bal - za - zu Mun - du - an fru - tu - ba

A - do - ra - tzen zai - tu - gu Ar - bo - la San - tu - ba

ff A - do - ra - tzen zai - tu - gu *p* Ar - bo - la San - tu - ba.

2

© Biblioteca Nacional de España



GUERNICACO ARBOLA.

Guernicaco arbola
Da bedeincatuba ,
Euscaldunen artean
Gutziz maitatuba:
Eman ta zabaltzazu
Munduban frutuba,
Adoratzen zaitugu
Arbola santuba.

Milla urte inguru da
Esaten dutela
Jaincoac jarrizubela
Guernicaco arbola :
Saude bada zutican
Orain da dembora,
Eroritzen bacera
Arras galduguera.

Estzera erorico
Arbola maitea,
Baldin portatzen bada
Vizeaico junta :
Laurac artuco degu
Surequin partia
Paquan bicidedin
Euscaldun gendia.

Betico bici dedin
Jaunari escatzeco
Jarri gaitecen danoc
Laster belanico :
Eta biotzetican
Escatu ezquero
Arbola bicico da
Orain eta guero.

Arbola botatzia
Dutela pentzatu
Euscal erri guziyan
Denac badaquigu:
Ea bada gendia
Dembora orain degu,
Erori gabetanic
Iruqui biagu.

Beti egongocera
Uda berricoa ,
Lore aincinetaco
Mancha gabecoa :
Erruquisaitz bada
Biotz gurecoa,
Dembora galdu gabe
Emanic frutuba.

Arbolac erantzua du
Contus bicitzeco,
Eta biotzetican
Jaunari escatzeco:
Guerrarie nai ez degu,
Paquea betico,
Gure legue zucena
Eman maitatzeco.

Erregutu diogun
Jungoico jaunari
Paquea emateco
Orain eta beti :
Bay eta indarrare
Cedorren lurrari
Eta bendiciyoa
Euscal erriyari.

Orain cantaditzagun
Laubat bertzo berri
Gure Provinciaren
Alabantzagarri:
Alavac esaten du
Su garrez belerie
Nere biotzeca
Eutzico diat nic.

Guipuzcoa urrena
Arras sentitirie
Asi da deadarrez
Ama Guernicari:
Erori etzeitzen
Arrimatu neri
Zure cendogarriya
Eman nacazu ni.

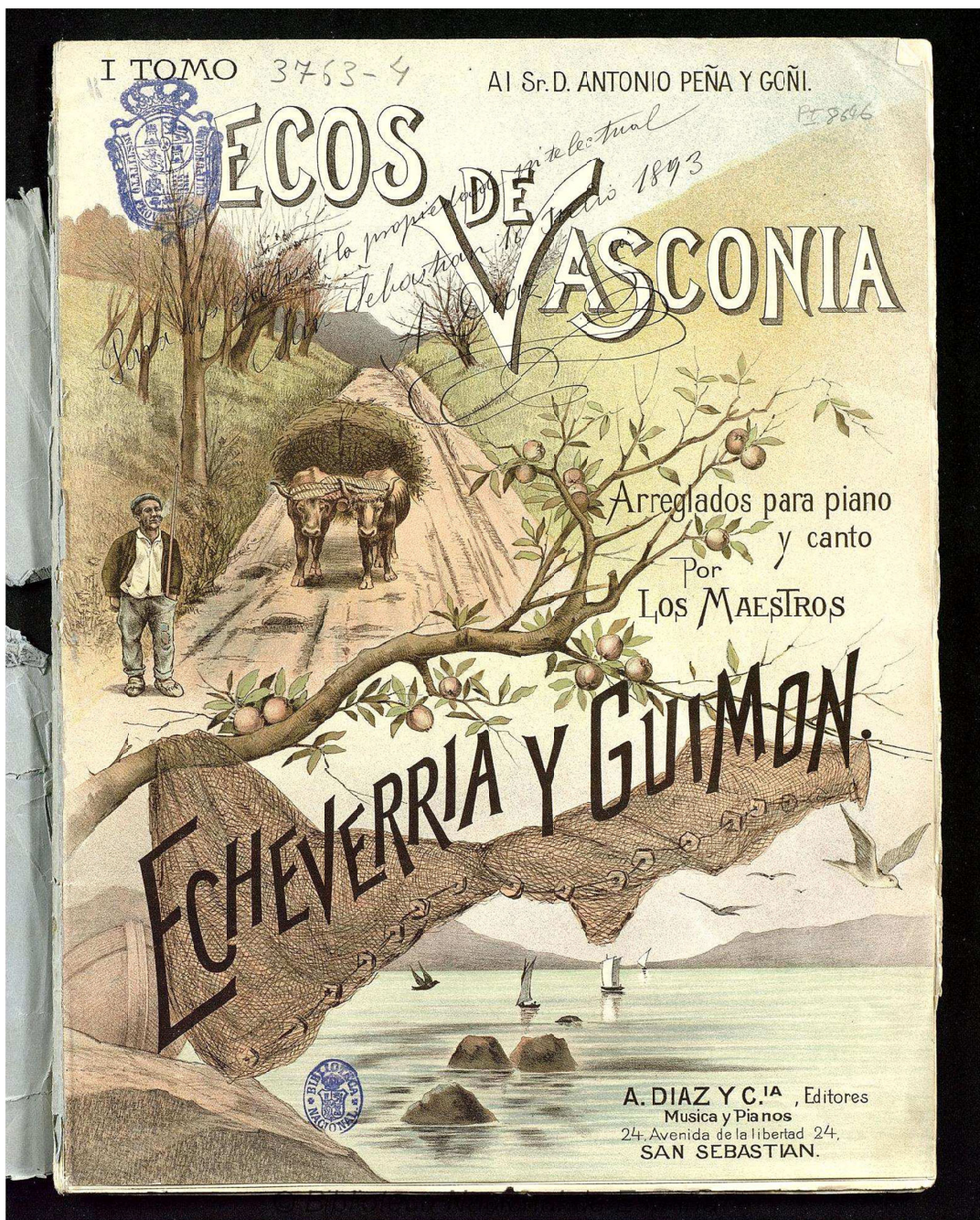
Ostoa verdia eta
Zañac ere fresco,
Nere seme maiteac
Ez naiz erorico :
Bearteen banaiz ere
Egon beti pronto
Nigandican etzaya
Itzurerazoco.

Gutziz maitagarria
Eta oestarguia
Beguiratu gaitzazu
Ceruco erreguia:
Guerrarie baguetanic
Bici albaguia,
Oraindano izan degu
Guretzaco dia.

© Biblioteca Nacional de España

そこで、この誤りを直した版で、広く用いられたものを探すと、同じ SAN SEBASTIAN で出版された、A.Dias y Cia. Editores 社の“Ecos de Vasconia”のシリーズがそれにあたるとされている。歌いだしの弱起の部分も、正しく譜面に記されている。

このエディションにも、歌詞が 12 番まで印刷されている。しかし、今日広く一般的に歌われている歌詞とは、いささか異同がある。例えば一番の Bedeinkatua は、bedeinkatuba に、そして、Santua は、santuba になっている。これは、現行の正字法と楽譜出版当時の正字法の差異や、地域的語彙の差異によるものであると考えられる。



©BIBLIOTECA NACIONAL DE ESPAÑA

34

Guernikako Arbola.

Nº 16.

Zortzico.

Música y Poesía de Iparraguirre.

Energico.

ff Fine.

Guer - ni - ka - ko - ar - bo - la Da ta-dein-ca - tu - ba Eas-kal - du-nen ar -

te - - an Guz-tiz mai-ta - tu - ba. Guer - - ba, E-man ta za - bul -

tza - - zu Mun-du-ban fru - tu - ba E-man - ta za - bul - tza - - zu

Mun-du-ban fru - tu - ba A - do - ra-tzen zai - tu - gu Ar - bo - la San - tu -

A. Díaz y Cia editores San Sebastian.

D. y. 29 J.

© Biblioteca Nacional de España

ba A - do - ra - izen zai - tu - gu Ar - bo - lu San - tu - ba.

2.
Milla urte inguru da
Esaten dutela
Jaincoak jurrizbela
Guernikako arbola:
Saude bada zutican
Orain du demboru,
Eroritzen bacera
Arras galduguera.

3.
Etzera erorico
Arbola maitea,
Baldin portatzen bada
Vizcaino juntia:
Laurok artueo degu
Surequin partia
Paquian bicidedin
Euskaldun gendia.

4.
Betico bici dedin
Jaunari escatzeko
Jarri guitecen danoe
Laster belauinico:
Eta biotzetican
Escatu esquero
Arbola bicico da
Orain eta guero.

5.
Arbola botatzia
Dutela pentzatu
Euskal erri guztiyan
Denac badaquigu:
Ea bada gendia
Dembora orain degu,
Erori gabetanico
Iruqui biagu.

6.
Beti egongocera
Uda berricua
Lore aincinetaco
Mancha gabecoa:
Erruquilsaitez bada
Biotz gurecoa,
Dembora galdu gabe
Emanic frutuba.

7.
Arbolac arnutzun du
Contus bicitzeko,
Eta biotzetican
Jaunari escatzeko:
Guerrario naiez degu
Paquea betico,
Gure legue zuenac
Emen maitatzeko.

11.
Ostoa verdia eta
Zaŕac ere fresco,
Nere seme maiteac
Ez naiz erorico:
Beartzen banaiz ere.
Egon beti pronto
Nigandican etzayac
Itzurera zoco.

12.
Gustiz maitagarria
Eta oestarguiŕia
Beguiratu gaitzasu
Cernco erreguiŕia:
Guerrario gabetanico
Bici albarguiŕia,
Oraindaŕio izan degu
Guretzacodiŕia.

8.
Erregutu diogun
Jaungoico jaunari
Paquea emateco
Orain eta beti:
Bay eta indarrare
Cedorreo lurrari
Eta bendicirioa
Euskal erriyari

9.
Orain cantaditzagun
Laubat bertso berri
Gure provinciarren
Alabantzagarri:
Alabac esaten du
Su garrez beteric
Nere biotzekua
Eutzico diat nio.

10.
Guipuzcoa arrera
Arras sentitiric
Asi da deudurrez
Ama Guernikari:
Erori etzeitezen
Arrimatu neri
Zure cendogarrirya
Emen naeazu ni.

D.y. 29 J.

© Biblioteca Nacional de España

バスク地方は、フランコ大統領の治世に、エウスケラ バスク語の使用が禁止されていたため、地域ごとの発音ヴァリエーションが、その地域の正字法に反映されてしまったようで、そのために、今日の正字法は、歴史的なそれとは違うものとなっているようだ。

筆者も、何人かのエウスケラ バスク地方出身のイスパニア人に確かめたが、地域差によるものと考えられるとのことであった。

ここで一言付け加えておこなれば、例に示したタイプの音韻の変化は、ヨーロッパ地域に於いては、比較的好くみられるものであるそうだが、エウスケラ バスク語にもそれが妥当するかどうかは、確証を得られなかった。

バスク自治州の公式ホームページからリンクされている今日の正字法による歌詞は、以下の通りである。

今日の正字法による歌詞

Gernikako arbola da bedeinkatua Euskaldunen artean guztiz maitatua. Eman ta zabal zazu munduan frutua adoratzen zaitugu arbola santua	Betiko bizi dedin Jaunari eskatzeko jarri gaitezen danok laister belauniko. Eta bihotzetikan eskatu ezkeror arbola biziko da orain eta gero.	Arbolak erantzun du kontuz bizitzeko eta bihotzetikan Jaunari eskatzeko, gerrarik nahi ez degu pakea betiko, gure lege zuzenak hemen maitatzeko.
Mila urte inguru da esaten dutela Jainkoan jarri zuela Gernikako arbola. Zaude bada zutikan orain da denbora eroritzen bazera arras galdu gera	Arbola botatzia dutena pentsatu denak badakigu. Ea bada jendia denbora orain degu erori gabetanik eduki behar degu.	Erregutu diogun Jaungoiko Jaunari pakea emateko orain eta beti. Baita indarra ere zerorren lurrari Euskal Herriari.
Ez zera eroriko arbola maitea baldin portatzen bada Bizkaiko Juntia. Laurok hartuko degu pakian bizi dedin euskaldun jendia.	Beti egongo zera uda berrikoa lore aintzinetako mantxa gabekoa. Erruki zaite bada bihotz gurekoa denbora galdu gabe emanik frutua.	

< 歌詞 <http://www.hiru.eus/cultura-vasca/el-arbol-de-gernika> のHP >

演奏や歌詞に差異はあるものの、芸術音楽の作曲家が作品として残したソルチコの楽譜にみられる拍子は、基本的に、5拍子であった。これは、エウスケラ バスク地方の民俗音楽に於ける拍子の多様性とは裏腹に感じられる事実ではあるけれども、「拍」の持つ意味の多様性、「拍」の音価の揺蕩いを示すものとも解釈される。

それでは民俗音楽のソルチコは、如何なるものなのであろうか。そのヴァリエーションは、甚だ多く、いまだに十分な、視座が得られていないので、更に検討を加えて、次稿に譲ることとする。

* * * * つ づ く * * * *